

2018年10月6日(土)、27(土)開催 秋の特別リシュモアレレッスンのための 予習講座(内藤晃先生より)

※こちらは、2018年9月9日に開催した予備レッスンの概要・説明です。

リシュモアレレッスン当日までの間、普段のレッスンの中でも、各担当講師から生徒さんへ本内容についてお伝えします。別途、内藤晃先生によるワンポイント動画もご覧ください。

オーケストラなど、多くの演奏家がアンサンブルをするとき、個人個人の演奏家は作品に対して違うイメージを持っているかもしれません。指揮者が前に立ち、ジェスチャーでひとつの方向性を示すことで、アンサンブルをまとめることができます。

音楽は、音で人の心を動かしていくものです。演奏家の心の動きが音にあらわれると、その音を通じて聴き手の心を動かすことができます。音楽の中にある心の動きを、指揮者が先回りして示していくことによって、演奏家の心を生き生きと動かし、演奏に生命を吹き込んでいくことができます。指揮者の動きにつられて、演奏家の出す音が変わるのですが、音楽の捉え方も動きも指揮者によってさまざまなので、同じオーケストラでも指揮者が違うと驚くほど音楽が変わります。

ベートーヴェン: 交響曲第5番「運命」

ヘルベルト・フォン・カラヤン指揮ベルリン・フィル <https://youtu.be/9aDEq3u5huA>

クラウディオ・アッパード指揮ベルリン・フィル https://youtu.be/Xn_s4YAAZHk

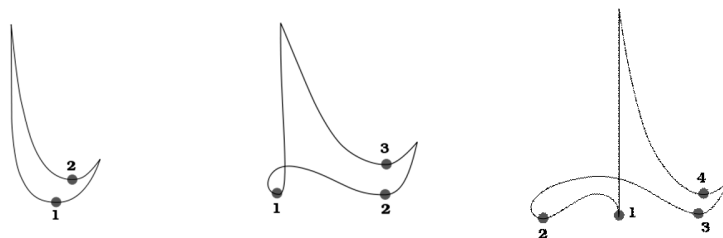
いちおう、指揮の仕組みについて簡単に解説しておきます。指揮の動きのベースとなるのは、加速・減速をもつ振り子の動きです。振り子の加速・減速を保ちつつ、各拍の軌道に決まった方向を持たせることで、演奏家に拍子をわかってもらうことができます。これが指揮の図形となりますが、図形をえがくのは目的ではなく、あくまで今どこかをあらわす道しるべであって、音楽の曲想の変化を先回りして導いていくのが指揮者の重要な仕事です。

振り子は、だんだん加速していき、真ん中の点を境に減速していきますが、この動きにより、最も速くなり真ん中の点を通過するタイミングの予測がつかます。この点が拍になり、各拍の動きで、拍に向かって加速していく軌道を「点前」、拍を通過し減速していく軌道を「点后」と言います。

■振り子の動き

https://ja.wikipedia.org/wiki/振り子#/media/File:Pendulum_60deg.gif

■指揮の図形 (添付画像)



次の歌い出しに大きな曲想の変化がある時、前の拍の「点后」で先回りして示していきます。たとえば、大きく振り上げれば、次のfへの意気込みを与えることができ、ふんわりと抑えると、次のpを丁寧に歌い出す心の準備をしてもらうことができます。また、新たな歌い出しがあるとき、一緒に呼吸してあげると、演奏家が歌い

出しやすくなります。いずれにしても、音の表情を変えるには心の準備と脳からの指令が必要で、そのためには、音を出す瞬間の指示では間に合わず、必ずその前の拍で示していかなければなりません。

これは、指揮者に限らず、みなさんが楽器を演奏するうえでも、「先回りして音楽を感じながら、音楽に寄り添って気持ちを高めたり低めたりし、それが音にあらわれるようにしていく」ことが非常に重要です。今回の特別講座では、音楽の変化を先回りしてジェスチャーで伝える経験を通じて、みなさんが楽器演奏で、心で感じたことが間に合って音に伝わるようになってくれるととても嬉しいです。

そこで、指揮そのものよりも、曲想の変化を「なんらかのジェスチャーや表情で、先回りして伝える」ということを、目標にしたいと思います。次のレナード・バーンスタイン(アメリカの指揮者)のビデオは、顔だけで指揮をしているもので、音楽を導いていくタイミングがとてもよくわかると思います。

ハイドン:交響曲第88番 終楽章

レナード・バーンスタイン指揮ウィーン・フィル

<https://youtu.be/kke4SyaP25c>

今回題材にする曲は、モーツァルトの「アイネ・クライネ・ナハトムジーク」です。ビデオを2つほど貼っておきます。

ジョージ・セル指揮ウィーン・フィル <https://youtu.be/6p-KyFXL2yg>

カール・ベーム指揮ウィーン・フィル <https://youtu.be/nPbxIT9W1AY>

4つの楽章から、チャレンジする楽章(主に冒頭のあたりを使います:第1楽章…最長55小節まで/第2楽章…スコア最初の1ページ(16小節まで)/第3楽章…短いのでもしかしたら全部/第4楽章…最長55小節まで)を決めて、楽譜をこちらからダウンロードしてください。

指揮者は、すべてのパートの楽譜がタテに同時に記された「スコア」を見て音楽をつくります。この曲は、第1ヴァイオリン、第2ヴァイオリン、ヴィオラ、チェロの4つのパートからなるので、スコアは4段譜になっています。ヴィオラは、ト音記号でもヘ音記号でもない「ハ音記号」で書かれているので、もしかしたら見慣れないかもしれません。

ピアノの編曲版もダウンロードできるようにしておきました。今回はどちらを見てやってくださっても構いません。

https://drive.google.com/open?id=1uizNiG1k0ODcd4Kik_n-eVEALY9AKK-R

第1楽章アレグロは、4拍子です。

第2楽章アンダンテは、遅い2拍子で、4拍子で振ります。アウフタクトで3拍目から始まるのに注意してください。

第3楽章メヌエットは、3拍子です。アウフタクトで3拍目から始まるのに注意してください。

第4楽章アレグロは、2拍子です。アウフタクトで2拍目のウラから始まるのに注意してください。

今回、みなさんは、(1)「拍を図形で示しながらそのなかで次の曲想を導いていく」指揮そのものに果敢にチャレンジしてくれても、(2)「なんらかのジェスチャーで、曲想を先回りして示していく」ことだけに集中しても、どちらでも良いことにします。いずれにしても、曲想が変わるところや、新たに歌い出すところなどを、担当曲の中でチェックして、その変化を先回りして伝えられるよう、工夫してみてください。

今回は、プロの弦楽器奏者が4人も来てくださる、という、普通ではありえないような贅沢な企画なので、ぜひ、しっかり曲を覚え、どうすれば変化を先回りして伝えられるか、イメージをえがいたうえで、参加してください。よろしくお祈りします。

内藤 晃